

I 調査にあたって

当関西学院大学考古学研究会はその周辺に存在する遺跡を調査研究の対象として研究会の主たる目的としてきた。その目的たる遺跡は広く知られており、高池性集落として著名な五ヶ山弥生遺跡の他、古墳時代後期の群集墳が存在している。しかしこれら数多くの遺跡も、近年になって開発による遺跡破壊が進み、そのかず数十基といわれに上ヶ原古墳群・五ヶ山古墳群・仁川旭ヶ丘古墳群などの群集墳は、今では9基を残すのみである。

当研究会は、このような遺跡破壊の現状に対処するため、また研究会の関学周辺の遺跡調査研究の一環として、今回この関西学院構内古墳（以下関学古墳と略記する。）の現状報告及び遺物実測をすることになった。この関学古墳は昭和34年に西宮市史編纂のために武藤教授を中心として調査され、西宮市史に報告されている。以上のような関学古墳をめぐる状況の変化にともない、また前回の調査の出土遺物で未発表のものを紹介するため今回の調査が行われた。

今後、関西学院大学考古学研究会の調査研究の一環として今回実測調査を行なった関学古墳のほか、他の上ヶ原古墳群や五ヶ山古墳群・仁川旭ヶ丘古墳群も、またこれら後期群集墳ばかりでなく、他の時代の遺跡遺物をも研究会の調査研究

の対象としていく予定である。

今回の調査にあたっての調査団の構成は以下のように行ない、ただし4年生の岡野・黒田、1年生の坂井の3人が総振調査で初日以外不在のため、今回の実測は3年生が中心となって行なった。

石室班 岡野慶隆・黒田昇司・北山勇・高橋さとる・岩橋信幸・杉本律子・坂井秀弥・田中典子・小野登茂子

壇丘班 小島周二・畠山恵至・足立正乾・遠藤万里子・矢口精

また11月23, 24日の両日は大学院生岡本氏の指導協力を得た。

なお本書の執筆は、院生の岡野の他、北山、小島、畠山、岩橋、坂井、小野、矢口が分担し、図版の作成については、各調査員が原図を担当し、岡野、北山、杉本、坂井が製図にあたった。(北山勇)

Ⅱ 調査日誌抄

11月 20日 (水) 曇り

午後1時に集合、道具確認の後調査にとりかかる。石室と墳丘測量の2班に分かれ作業開始。石室班は石室内部の割り付けを行なう。なお石室内には、石室に使用された石が若干散在していた。ベンチマークをつける。墳丘班は基準線のレベルを求める。(71.165m)次に、道や建物の測量を始める。

11月 21日 (木) 曇り一時雨

本日より両班とも本格的に実測を開始する。石室班は、奥壁、側壁、平面、玄室断面図の実測を始め、平面図のみ完了する。墳丘班は、25cmコンタで等高線を引き始める。途中雨が降り始め作業を一時中断した。

11月 22日 (金) 晴れ

昨日と同様10時作業開始。石室班は、右側壁、奥壁、玄室断面図の実測を完了する。残るは、左側壁のみ。墳丘班は昨日に続き等高線を引きいていく。昨日同様雨のため一時作業を中断する。4時半に終了して道具を片付ける。

11月 23日 (土) 晴れ

昨夜の雨で足下が濡れたためそれほど作業に障害とはな

らなかつた。石室班は、左側壁の実測を完了し、石室内はすべて完了する。墳丘班は墳丘の等高線を終え、平板をA点からB点に移し、地形実測を始めるが、少し残り明日に回す。

11月24日(日) 晴れ

地形実測の残りも午前中にすべて完了。石室の前で記念写真とり、道具を整理し今回の調査を終了した。(島山恵至)

Ⅲ 位置と環境

関学古墳は西宮市上ヶ原関西学院敷地内の西北隅に所在し、現在西宮市の文化財に指定されている。古墳の立地する地域は六甲山系の東端の独立丘、甲山東麓からなだらかに傾斜する上ヶ原台地上で、標高80m未満の地点である。

周辺最古の遺跡には、芦屋市朝日ヶ丘縄文遺跡があり、縄文前期及びそれ以前の石器の出土例があるが、^{註①}遺構は認められず、当時の状態を明確に把握することはできない。

弥生時代にはいると、上ヶ原台地上においても、その周端部（標高20～40m）に六軒山遺跡、越水遺跡、岡田山遺跡等が存在するようになる。しかし、どの遺跡も遺物の散布が認められたのみで、調査により遺構が認められたのは、仁川溪谷の北岸、標高130m～145mの丘陵上に立地する五ヶ山遺跡のみである。また、六甲山南麓地域では、五ヶ山^{註②}遺跡と同じ系統にはいる標高100m以上の高地性集落遺跡として、芦屋市会下山遺跡、同城山遺跡、神戸市伯母山遺跡、^{註③}^{註④}^{註⑤}神戸市金鳥山遺跡^{註⑥}などが知られている。

古墳時代にはいると、海岸線に近い平野部に前、中期の古墳が造営された。前、中期には神戸市の扁保曾塚、東求女塚、姫女塚古墳、大正年間に消滅してしまった西宮市大塚古墳、稻荷山古墳、芦屋市では親王塚、金津山古墳等が造られた。

後期になると、横穴式石室古墳が群集墳の形をとって山麓台地上に分布するようになる。巨視的に見た場合、六甲山系での後期古墳群は、東より、仁川を挟む3つの古墳群、八十塚古墳群の^{註②}顕著な群集状態を示しており、それぞれいくつかの支群に分かれている。

仁川を挟む3つの古墳群は、仁川南岸の上ヶ原古墳群、北岸の五ヶ山古墳群、仁川祖ヶ丘古墳群である。

上ヶ原古墳群は、関学古墳の他に、^{註③}上ヶ原浄水場内古墳、県立西宮高校に移築された入組野古墳を含めて、3基が現存するのみである。しかし、もとは十数基が存在したといわれている。また、現在の関西学院中学部付近には、車塚という^{註④}前方後円墳が大正年間まで存在していた。この古墳は上記の3つの古墳よりはいくぶん時期が早いのぼる。

仁川対岸の五ヶ山古墳群には3基の横穴式石室墳が現存しており、73年には新たに2基が発見された。また、祖ヶ丘古墳群は現在2基の横穴式石室墳が存在している。ほかに、広田神社の東方、御手洗川右岸の標高30mの丘陵上には具足塚古墳が74年度に再発見されている。

芦屋市八十塚古墳群は、西より、朝日ヶ丘、岩ヶ平、老松町、苜蓿園五番町、剣谷という支群に分けられ、その規模の大きさにおいて広く世に知られてきた古墳群である。

また、武庫川以東においては、宝塚市長尾山系の古墳群が

西摂平野屈指の大群集墳として著名である。

(小島周二、坂井秀弥)

- 註①藤井祐介「朝日ヶ丘縄文遺跡」
芦屋市教育委員会 1973
- ②石野博信「小立壁と野蔵室をもつ弥生住居跡」
関西学院史学Ⅱ 1967
- ③村川行弘・石野博信「会下山遺跡」
芦屋市教育委員会 1964
- ④村川行弘「芦屋城山遺跡調査概報」芦屋市文化財
調査報告第1集 芦屋市教育委員会 1959
- ⑤若林泰・斎藤英二「伯母野山遺跡」
神戸市教育委員会 1963
- ⑥石野博信「神戸市金鳥山遺跡」
古代学研究第48号 1967
- ⑦村川行弘「朝日ヶ丘縄文遺跡、八十塚古墳群」芦
屋市文化財報告第4集
芦屋市教育委員会 1966

Ⅱ 調査の方法

今回の関学古墳において実施した調査方法は、発掘調査を伴わない実測調査である。以下、その方法を順次述べていく。

(1)水準測量

本調査の水準基準は、西宮市役所の2500分の1の地図により、墳丘北東部のO.P = 69.9mの杭を利用した。

(2)平板測量

まず墳頂部に P_1 を設定し、墳丘の周位に任意に $P_0 \sim P_n$ を設定し、これを基準として墳丘実測を行なった。なお縮尺は、100分の1とした。

(3)石室実測図の作成

・平面図の作成

石室の主軸にほぼ平行するように、基準線 $P_0 - P_0'$ を設定する。(主軸方位の測定にはクリノメーターを使用した。)基準線をもとに、石組最下段の平面図を縮尺20分の1で作成した。

・側面図の作成

基準線 $P_A - P_A'$ (O.P = 71.165m)を設定し、基準線をもとに両側壁の側面図を縮尺20分の1で作成した。

・断面図の作成

横断面図及び羨道部断面図は、それぞれ P_{01} , P_{02} (P_0

から、 $+1.00m$, $+3.00m$)を基準点として作成した。
(岩橋信幸, 小野登茂子, 浜口精)

V 調査結果

(1) 古墳の外形

関学古墳は、墳丘、石室ともにほぼ円状をとどめており、上ヶ原古墳群中唯一の貴重な遺構として知られてきた。以下地形図をもとに古墳の外形を述べてみる。

関学古墳の周辺には、南北に小径を挟んで小屋が建っており、古墳のすぐ東側には小川が仁川溪谷に向けて流れている。また、古墳の周囲にはそれぞれ小径がつながっている。このように古墳周辺の旧地形は明確とはいえない。また、墳丘の基底部付近は小径などによる封土の流失が認められる。墳丘の最高点付近も中心と思われる地点からずれているため、若干の削平が考えられる。墳丘の東側は、標高73.50mから72.00mにかけて急傾斜が顕著となっている。現在ではこの部分に地くずれや凹地がめだち、かなりの封土の流失が考えられる。また、奥壁付近には天井石の一部が露出している箇所があり、そこから大量の土砂が玄室内にくずれ落ちている。このように当墳は、墳丘、石室ともに保存状態がよいほうであると言いつつも、日に日に荒廃する可能性のある古墳なのである。

以上、封土の流失などによる旧地形の微妙な傾斜を計ることは困難になりつつあるが、現状から判断していくと、当墳

は、西部で標高71、75m、東部で標高70、25mの傾斜地に東西の基底部をおき、そこに直径約12.00m、高さ約3mの円墳を築造したものとみられる。なお、埴輪列、葺石などの外部施設構はこの調査でみるかぎり確認できず、封土の流失を考慮に入れても、はじめから存在していなかったと考えられる。(小島周二)

(2) 内部主体

関孝古墳の内部主体は、主軸をN-12°-Wにとり、南に開口する狭長な平面プランをもつ右片袖式横穴式石室である。

石室の規模は、羨道部先端が若干日状を損じていると思われるが、石室現存長9.28m、玄室長4.98m、羨道現存長3.28m、玄室奥壁幅1.5m、羨道幅(玄室入口)1.2mを測る。

石室内には、玄室北東隅上部の崩壊している部分から流入した土砂が、玄室奥壁付近にかなり堆積している。

玄室部には4枚の天井石を架構し、その高さは2.3mを測る。

玄室の両側壁は、角のとれに、やや大形の花崗岩によって、6~7段に横積みされ、左右からもち送っている。石と石とのすまみ間には直径20cm程度の栗石を数多く用いている。

奥壁には高さ1.8m、幅1.5mの一枚石を用いている。

羨道は、高さ1.2m、幅1mのやや大形の石を縦積みし、羨門としている。天井石は1枚だけ現存し、羨道高は1.7mを測る。

羨道部は羨門部が狭く、入口付近になるほど幅広くなっている。

石室の石材は、六甲山系南麓の群集墳通有の黒雲母花崗岩の河原石を用いている。

羨道に残る天井石には、近世のものと思われるくまびの痕跡が残っている。これから羨道部が破壊された時期を推定できるかもしれない。(岩橋信幸)

Ⅱ 考察とまとめ

関孝古墳は、上ヶ原古墳群の内では1基だけ現存する貴重な古墳である。上ヶ原古墳群自体についての論究は後述するとして、ここでは当墳の特徴について若干の考察を加えることにしたい。

関孝古墳の内部主体については、いくつかの注目すべき点、がみうけられる。

1. 狭長な平面プランをもつ。

2. 石室には、左右からのもち送りがみられる。

3. 石室を構築している石材は、角のとれに河原石である。

1については、ちなみに玄室幅指数3.0を割り白石太一郎による石室型式区分の第Ⅴ型式にあたる。^註しかし、玄室と羨道の区別は厳然としており、しかも玄室長は、羨道が若干旧状を損じていると思われるが、羨道長とうねまわっており、一概にこの型式区分にあてはまるものではない。

2.の石室のもち送りについては、3.の石材との関連からとらえることができよう。石材のほとんどが河原石でしめられているが、その河原石で石室を構築する場合、壁と垂直にするより、若干もち送った方が天井石も小形ですむ。

以上、石室だけについてみた場合、上記のように様々な要素がみとめられ、石室が構築された時期を定めることは困難

である。しかし、当墳も六甲山系南麓に群集墳が造営された時期（6c後半）に構築されたものと思われる。

関学古墳をみた場合、石室の形態からすると6c後半の様相を呈している。しかし遺物についてみた場合、関学古墳は古くから開口しており盗掘をうけたと思われ、遺物が持ち去られるに可能性が大きく、遺物があったと推定される。その残された出土遺物において、大まかの異なる金環が5個あることなどから少なくとも5人が埋葬されたと思われ、また当古墳から出土した坏がフとはじめ頃のものであることからすると追葬が行われたものと思われる。

古墳時代後期後半の古墳において、玉類の副葬が減少していく中で、当古墳でそれらが豊富にみられることから、後期古墳でも古い時期の様相とも兼ね備えていると言えるのではなかろうか。また、滑石製の勾玉についてであるが、滑石製の副葬品は古墳時代前半期、特にⅢ、Ⅳ期の古墳に多くみられ、後期にはそれらが衰退していくのであるが、後期後半の古墳で勾玉、特に滑石製のものが出土しているのは珍しい。

以上、遺跡遺物から当古墳をみた場合、6c後半に当古墳が造営され、第1次の埋葬がなされ、少なくとも7cはじめ頃まで追葬が行われたと思われる。（北山勇，岩橋信幸）

註 白石太一郎 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」 『古代学研究』第42・43合併号

VII 持論

(1) 上ヶ原古墳群の復元

はじめに

仁川をはさむ古墳群のうち、上ヶ原古墳群はこれまでの記録からみて、現在までにその破壊数が最も顕著な古墳群である。現存する古墳は、関学古墳と上ヶ原浄水場内古墳の2基にけで、過去の記録にあらわれる数10基ばかりの古墳は消滅してしまっている。これらの古墳は、神戸市上水道上ヶ原浄水場の建設工事（大正年間）と関西学院の移転（昭和4年）、およびそれに伴った住宅街の建築工事などにより破壊されたといわれている。そして現在ではこれらの古墳の元の位置さえわからない状態である。^{註①}そこで私は過去の記録などから、上ヶ原古墳群の範囲と規模をここに復元してみようと思う。

I

上ヶ原台地周辺の遺跡が知られるようになったのは、紅野芳雄氏が『考古小録』を著してからである。『考古小録』は紅野芳雄氏が明治41年から、氏が昭和13年に死去するまでの約30数年間に行なった遺跡踏査を日記風につづったもので、これを昭和15年に田岡香逸氏が編集している。上ヶ原台地周辺の遺跡のほとんどが消滅してしまっている現在、^{註②}

かつマの姿を復元する上で絶好の資料であるといえよう。その中から上ヶ原古墳群に關した記述を拾い出してみよう。

武庫郡甲東村上ヶ原甲山登山口下の貯水池拡張の際、二三の古墳を掘り当て土器類及び刀剣具類出土す。度々現場に行き発掘品を採集す。藤、坏、瓶、台付盃、鍔金鐙及び鍔金刀金具、素焼盤等。（大正3年5月）

甲東村上ヶ原新田山手に神戸上水道貯水池工事中にて日々多数の古墳が破壊さる。本日現場へ行きて古墳の破壊をみる。素焼高坏一箇出たるのみ。（大正4年5月9日）

以上の記述は現在の神戸市上水道上ヶ原浄水場付近の事をいつているものと思われ、現存する浄水場内古墳周辺の古墳が推測される。また、

遺跡上（上ヶ原新田墓地西方）に三箇の破壊せられたる古墳あり（以前は沢山有りしが如し）。又墓地東方に於いても約十四の古墳を認む。内三基は開口し居れど封土完存、他は封土破壊し石槨露出す。大部は葺石を有せり。（昭和7年1月24日）

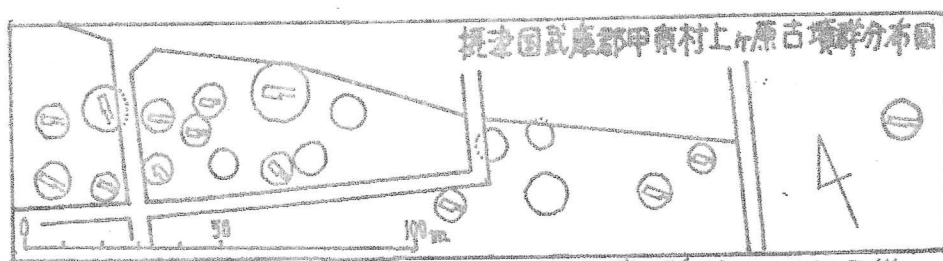
この文章にあたる現在の地点は、はじめの3基が仁川百合野町の住宅地から浄水場にかけての地点、後の14基は現在の関学古墳周辺で、現在の関学テニスコート、心理学研究館付近までの仁川溪谷に面した地点であろう。また、上述の内容と重複すると思われるが、

墓地東方松林中に散在せし十余の古墳は、今住宅地建設のため無残に破壊せられ、又破壊されつつあり。（昭和7年4月21日）

このように、『考古小録』からは古墳破壊の過渡期の状況が理解できる。

Ⅱ

次に上ヶ原古墳群に関する資料としては、昭和9年6月発刊の『考古学』第5巻6号があげられる。の中には、小林行雄氏が上ヶ原古墳群の分布図を載せられている。^{註③}



しかし、古墳群の内容については何も触れておられず、またその位置も明らかでない。これによると、約50m×200mの地域に20基の横穴式石室が群集しているのがわかる。そして問題は小林氏の書かれた分布図が現在のどの地点にあたるかである。おそらくは関学古墳付近からテニスコート、心理学研究館にかけての地域であろうと思われる。石室の開口方向、石室の型式など興味深いのだが、現在の環境からは

これらの古墳群を想像することさえ不可能である。

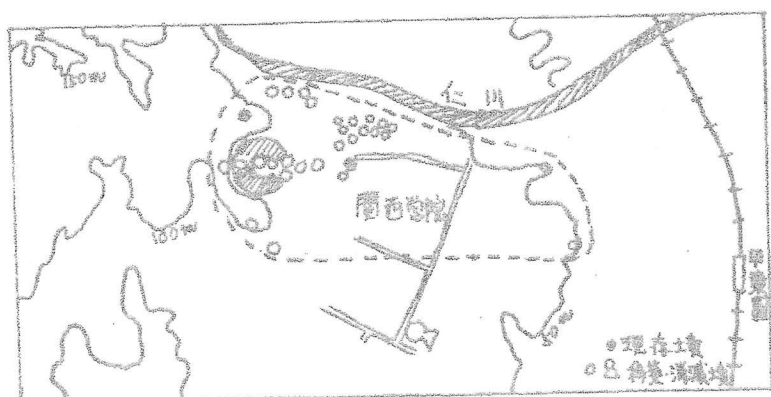
次に、昭和28年には、現在の甲陵中学校正門の西方にあった入組野古墳という小古墳が調査されている。この古墳も調査のうち破壊され、現在では県立西宮高校の校庭^{註④}に移築されている。また、上ヶ原古墳群の最東端には百又古墳という古墳があり、墓台が出土したといわれているが詳細は明らかでない。

III

以上により、上ヶ原古墳群の範囲及びその規模を考えてみたい。

上ヶ原古墳群は、その西端は現在の浄水場付近で、そこから東に仁川河畔に接し、仁川百合野町、関学古墳、関学テニスコート、心理学研究館にかけての密集、そして甲陵中学付近に至るまでの東西約1200m×南北約500mの範囲を有していたものと思われる。次にその古墳の総数を概算してみよう。まず、『考古小録』からは、浄水場付近の約数基（浄水場内古墳を含む）、新田墓地東二町の3基、墓地東方の10数基（関学古墳を含む）が考えられ、小林行雄氏製作の分布図から20基（墓地東方の10数基との重複が考えられる）、その他入組野古墳、百又古墳など。以上の事から上ヶ原古墳群は、記録からみれば30数基、その他を推定すれば約数10基の古墳の群集が考えられるのである。そして仁川

をはさんで存在する五ヶ山古墳群、旭ヶ丘古墳群との関係と
考慮に入れると、この仁川をはさむ群集墳は六甲山系におい
て、芦屋市の八十塚古墳群に匹敵する規模の大きさをも有して
いたといえよう。



上ヶ原古墳群推定分布図 1:25,000

(「考古小録」巻末分布図)
もともと伊賀

おわりに

上ヶ原古墳群を考える場合にもう一つの注目すべき点は、
群集の地点より約400mはなれた車塚という横穴式石室を
有する前方後円墳が存在していたことである。しかし、この
古墳も大正頃に消滅してしまっ詳細は明らかでないが、後
期の前方後円墳であったと思われる。このように、上ヶ原古
墳群の構造を理解するには、現在まったく手が届かない。だ
といっまそのままだにしていたのでは古墳群が存在したことす
ら忘れられてしまう。そこで記録的であるにせよ、一つの群
集墳の存在を認知してもらおうと思っただけである。(川島周二)

註①武藤誠「考古学上からみた古代の西宮地方」
『西宮市史』第一巻 1959

②紅野芳雄「考古小録」西宮史談会編 1940

③小林行雄「技術から見た古墳の様式」
『考古学』第5巻第6号 1934

④武藤誠「西宮市上ヶ原入組野在横穴式石室古墳の
発掘」『関西学院史学』Ⅴ 1959

(2) 関学古墳出土の遺物について
(昭和34年度調査分)

昭和34年に発掘調査された遺物は下記の通りであり、その当時の調査状況については西宮市史第1・7巻を参照されたい。

須恵器としては埴1個・埴1個があり、装身具としては金環5個・滑石製勾玉1個・埋木製棗玉2個・碧玉製管玉9個・水晶製切子玉6個・ガラス製小玉36個があり、その他に鉄鏃4個・馬具(革帶留金具)1個、また埋葬遺骸つまり大腿骨のほか骨片、歯も出土している。

関学古墳出土の遺物説明

須恵器

埴——器形としては少し扁平で口頸部は少し外反しており、口頸部と器面外側の一部にヨコナデが施されている。また腹部から底部にかけて一部自然釉が付着している。この埴の口径は7.6cm、器高5.4cm、色調黒灰色、焼成は良好である。〔第7図〕

埴——口縁部は少し外反し、その端部は丸味をおびており、内面と外面の一部(口縁部も含む)にヨコナデが施され、底部は未調整である。口径は10.7cm、器高3.7cm、色調青灰白色、胎土良好、焼成は良好であり、時期としては森浩一氏の編年

で第4型式にあたり、7世紀の初め頃と思われる。
[第7図]

装身具

勾玉—色調は黒灰色を呈し、材質は滑石製である。穿孔にあたり、2つの穿孔をあわせて1つの穴に1つあり、穿孔部周辺に方形のくぼみを両面に施してある。長さ18mm、厚さ5mmを測る。[第6図]

環玉—大小2つのものがあり、材質は埋木製である。色調は2つとも黒色を呈し、大きい方は最大径14mm、長さ18mm、小さい方は最大径9mm、長さ14mmである。小さい方は少し扁平につくられている。[第6図]

切子玉—材質は水晶であり、形状は六角形で穿孔はすべて一方向から為されている。[第5図]

小玉—材質はガラスで色調は青紺色を呈するもの18個、青色のもの10個、緑色のもの6個、黒色のもの1個、水色を呈するもの1個、計36個出土している。大きいのは水色のものが径7mm、緑色のものが8mm前後である。その他の色調のものは4~5mm前後である。[第6図]

管玉—材質は碧玉製で、穿孔方法は双孔でほとんどが4.5~5mmで長さ13~18mmである。1つだけが径15mm、長さ35mmの大きいものがあり、これ

だけは穿孔方法が単孔による。色調は暗緑色のものがほとんど他に木色、青色のものが。

おのおの1個ずつある。管玉の総数は9個である。^{【第6図】}

金環—材質はすべて銅花金環と認められるが、全体的に表面の金の剥離がひどく、4がも、とも表面がよく残っており、その他では2が少し残っているだけである。【第5図】

なお今回の遺物の報告は西宮市史に発表された遺物を中心とし、鉄鏃、馬具及び未発表の遺物等は未整理のため次回に報告したいと思う。(北山勇)

遺物名	図面番号	色調	(最大)径 単位mm	長さ 単位mm	材質	備考
勾玉		黒灰色	厚さ 5	18	滑石製	
管玉	1	黒色	14	18	埋木製	
	2	"	9	14	"	
切子玉	1	白色透明	18	34	水晶製	
	2	"	16	32	"	
	3	"	17	33	"	
	4	"	16	27	"	
	5	"	16	25	"	
	6	"	15	23	"	
小玉		青褐色 青色 緑褐色 黒色	4~8		ガラス製	計36個
管玉	1	暗緑色	15	35	碧玉製	穿孔は単孔
	2	"	5	28	"	穿孔は双孔
	3	青色	6	20	"	"
	4	水色	4.5	21	"	"
	5	暗緑色	5	17	"	"
	6	"	6	14	"	"
	7	"	4.5	13	"	"
	8	"	6	14	"	"
	9	"	5	13.5	"	"

色環	1	黑灰色	33.5	數	8	鍍金金表	
	2	"	31		8		
	3	"	30		6		
	4	灰白色	25		5		
	5	金色	18		5.5		

表身具計數表

(3) 今後の課題

以上関学古墳の石室実測調査の報告を行ってきました。もちろん今回の調査は、今後行う予定である上ヶ原古墳群、五ヶ山古墳群、垣ヶ丘古墳群等の後期群集墳の研究の第一段階であり、まだまだ歩みはじめてばかりである。ここでは、今後これらの仁川をはさむ群の後期群集墳を扱う際におこる問題点を今後の課題として述べてみたい。

1. 群集墳の形成時期について

まず上ヶ原古墳群から見よう。関学古墳は出土した須恵器及び石室の型式からみて6世紀後半に築造されたものと考えられる。上ヶ原古墳群中、出土遺物の明確なのはこの1基だけである。また古墳群中、東よりに位置する入組野古墳はその石室形態から築造時期が推定できる。この古墳は全長2.3m、幅0.66m、高さ0.9mと小規模の無袖式横穴式石室を有する小円墳である。昭和28年の調査では副葬品はほとんど検出せず、^{註①}出土遺物によって、築造時期を決定することは困難であるが、その石室形態から7世紀に入ることが考えられるのではなかろうか。このように見ると、上ヶ原古墳群はほぼ6世紀後半から7世紀のはじめにかけて形成された古墳群と考えられる。

一方仁川対岸の五ヶ山古墳群1号墳では、7世紀はじめころの須恵器が、又垣ヶ丘古墳群2号墳からは6世紀の終り、^{註②}

ろの須恵器が生えていた。このことにより仁川対岸の2つの群集墳とも、ほぼ6世紀後半から7世紀のはじめにかけてが形成時期であると認められる。

以上のように仁川をはさむ3つの群集墳は、ほぼ6世紀後半から7世紀のはじめにかけて形成されたものと思われる。今後の課題としては、さらにくわしい形成過程の解明が望まぬよう。

2. 被葬者について

もちろん各古墳の具体的な被葬者をあげることは不可能である。又文献により直接特定の氏族を結びつけることも困難である。しかし抽象的ではあるが、一定次々ようにおおまかに3つの群集墳の被葬者の階層を考えることができるのではなかろうか。

先述のようにこから3群集墳は6世紀後半から7世紀のはじめにかけて形成されたもので、この地域の古墳築造量の圧倒的な増加の時期にあたる。このような現象は他地方はもちろん、大甲南麓一帯や長尾山でも一般的に見られるものである。こう考えた場合被葬者はやはり古墳時代中期からの生産力増大により出現した有力な農民層としてとらえることができよう。そして彼らの居住地及び耕地としては仁川下流を含む武庫川西岸の井積平野が考えられる。逆にいえば、この武庫川西岸に農業経営を営む農民層が彼らの墓域として仁川を

はさむ3つの群集墳を形成したととらえられるのである。そしてさらには、この3群集墳が1つのまとまりとして、又各古墳群が1つの単位としての血縁関係、又は氏族関係、又は農業経営の関係が考えられるのではなからうか。

ところでこの武庫川西岸においては糸屋の遺構が認められている。この糸屋の施行年代を決定することは困難であるが群集墳との関係も考えてみなければならぬ。

3. 前時期との関係について

武庫川西岸においてこの群集墳より時期の古いものとしては、旧海岸線真並の大塚、稲荷山の2古墳、そして上ヶ原台地の車塚があげられる。いずれも現在は消滅しているが、前方後円墳である。たと推定されている。そして各古墳の築造時期としては、稲荷山古墳が前期に、大塚古墳がそれよりも下の時期に、車塚が後期の前半にそれぞれあたることと推定されている。特に前者の2基の古墳は古代の重要な港である津門に立地することから、海上交通との関連が考えられよう。車塚は上ヶ原古墳群真並に存在し、見方によっては上ヶ原古墳群中に入れることもできるが、その築造時期は群集墳が形成される以前のようである。上ヶ原古墳群をはじめとする3群集墳を考える場合、関連づけられるものは、まずこの車塚であろう。車塚の埋葬者としては、上ヶ原台地より望める武庫川西岸の平野に勢力をもつた豪族が考えられる。そして間

もなく卑劣真直に形成される群衆墳の被害者は、この豪族の支配下の農民層とも推定することができるとはならないだろうが。

以上のように今後の課題として2, 3の問題点をあげることはできたが、このほかまだ見のびしている点もあると思われる。ともかく今後の課題としては、この地域における後期群衆墳築造の背景を浮きぼりにすることにあるといえよう。(岡野慶隆)

註①「埋蔵文化財調査記録」『西宮市史』第7巻
1959

②『西宮市史』には2号墳と記されている

③「埋蔵文化財調査記録」『西宮市史』第7巻
1959

④『仁川畑ヶ丘古墳群調査報告』
仁川畑ヶ丘古墳群調査委員会 1972

⑤渡辺久雄『条里制の研究』創元社 1968

⑥「考古学上から見た古代の西宮地方」
『西宮市史』第一巻 1959

⑦『日本書紀』神功皇后摂政元年二年条「更遷務古水門而ト之」、同、神天皇三一年八月条「遷葬於武庫水門」

VIII 調査参加者雑感

未熟ながらも、どしどし失敗しながらも最後まで何とかやり
とおすことができたらしい。今後とも開学周辺の遺跡を研
究対象としてやってみてみたいものだ。(小島周二)

考研に入ってから初めての仕事で、いわゆるままにレベルや
平板を使い、何とか実測することができた。何もかもが、は
じめのことで自己満足に終わったが、これから積極的に調
査研究に参加したい。(畠山恵至)

僕は宝塚市の調査の為、第一日目しか出ることができなかつ
た。その点、クラブの作業に通って参加することができず、
若干残念である。僕としては、夏休み雲雀ヶ丘の古墳の調査
に、1週間ぐらい出ていたのだから調査方法は一応理解できてい
たので、その復習に役立った。レベルや平板の使い方は、何
回も繰り返して体得せねばならぬことを痛感した。(坂井秀弥)

数日間の実測調査はただ単に参加したのみで、後は何もせ
ずにしまった。中途半端な無責任な作業に反省している。後
輩の今後の意欲的活動を大いに期待します。(高橋さとる)

4日間の実測調査のうち、参加したのは1日だけであった。
次回は、積極的に参加しようと思う。 (浜口 精)

数々の失敗を重ねながらも、はじめて考古学に触れた気が
した。とにかく精一杯やったという感慨が残っている。そ
で今後もできる限り、やるのみである。 (遠藤万里子)

大学祭の騒ぎを遠くに聞きながらの今回の調査は、非常に
しんどかったけれども、何もわからない自分にとって、少
でも役に立てばと思う。これから積極的に参加して
いきたいと思う。 (小野 登枝子)

Ⅳ あとがき

昨年11月に関学古墳の実測を行ない、今年3月に報告書を作成、完了させるべきものでありましたが、我々編集責任者の怠慢で今日まで遅延してまいりました。今回の調査は実測調査のみで、遺物については前回の関学古墳の調査のものを考察してまいりました。しかし研究会会員一同は、調査、執筆いすれも不慣れでいろいろ不備な点がありますが、この調査報告が西根の群集墳研究の資料となり、また我々につづく後輩たちの礎になることを期待したいと思います。また今年も、当研究会が中心となって昭和47年に行なった雲雀山東尾根A支群の調査報告書が出る予定になっています。研究会の方針として、当面は後期群集墳研究を中心とし、将来は後期群集墳の調査研究ばかりでなく、今年報告書の出さぬ高地性集落の五ヶ山弥生遺跡をはじめとする関学周辺の他の時代の遺跡及び関学所有の遺物について検討を加え報告していきたいと思っています。

なおこの調査及び報告書作成にあたっては、武藤教授をはじめ先輩諸氏より、御助言、御指導をいただいたことを記し深く感謝の意を表します。(北山勇)